

炎のエスキス

(残照編・二〇一一)より

小林守城

人生二毛作

赦すことは死の影を招くことだから
しばらくはそのままにして
あれこれ詩文に書きとめていく
蛙めが笑っていようが
泥の燕が宙返りしようが
人生二毛作　それがすべて

一期一会

のぞみ願った野放しだけど
時間は遊んでいてくれない
負けて惜しみて荷車を
引いていくよな二毛作
いいんだそれで　私の
わたしがだんだん遠くなり
癒しと赦しの夕焼けと
そして明日がついてくる
一期一会の朝がくる

「守城」考

わたしの城は砂の城
わたしの城は雲の城
炎と水のように自在で
自然に壊れてしまっても
心配しないで済むのです
生きかわり死にかわりして

打つ田かな（鬼城）

高崎の村上鬼城や

北茨城の野口烏城（雨情）から

お札を受けてきたのです

古いピアノ

いつまでたっても古い家の
ピアノは片付けられないだろう
夜中にこっそり帰ってきては
練習曲をピアノニッシモで弾く
子どもがまだどこかにいるのだから

ランドセル

古い家の庭から移植した牡丹が
つぎつぎに三輪も咲いた
崩れ落ちそうに危うく揺れている
大きくて真新しい一年生の
ランドセルのようだ
もういいよ そつと耳打ちする

同級会

初めて聞いた英語の「SHE」
黒板の文字が眩しくて
「彼女」という言葉が
初恋を意味していたころのこと
ふる里すててはないちもんめ
みんなどうしてるかや
啄木や牧水に感傷したあのころ
砂のように さようなら
白鳥しらとりのように さようなら

風見鶏

風は天から吹いてくる
近頃は放射能まで連れてくる

流れに向かって真つすぐに
魚は姿勢を保つように
荒れた海では真つすぐに
波に向かって直角に
舟は進むほかないように
ひとりになってじっと見てれば
風見鶏は高いところで
さびしい受難の顔をしているよ

道案内

雨も雪もまことの言葉を語りつづける
放射能をまとった真言の暗闇
ここからいずこへでてゆくのか
子どもが眠らずに耳を傾けるような
きらきらとした道案内ができようか
古希近い詩人が見つけた
縦の梢で汚れている
梵字菩薩のさびしい姿

放射能

それでもわたしたちはいま
宗教改革者・マルチンルターのように
たとえ明日、世界が終わりであっても、
私は今日、リンゴの木を植える。
そんなことができようか
生きものの祈りだけ残して
宇宙は回っているだけだ

美しい直線

定規を当てて引いた美しい直線が恐い
美しく狂うことが私たちの文明だったと
子どもたちに伝えられるか いま
定規なしの直線は真つすぐな曲線だ

夢を見る人のたおやかな筋肉のように

絆

三・一一以降

大切な絆を取り戻そうとするとき
それは加害の絆であったことを
かたときも忘れてはならない
たなざらしの自分のことを
原爆のあとも 戦争のあとも

桜前線

そのとき 遠くにあつた人たちは
呻きの言語野をさまよい
わが身の無事を顧み
同じ運命でなかったことに苦しむ
その辛さに追い立てられ
救援隊になり募金活動を始めたりする
消え去った人や街をそ知らぬように
桜前線は陸奥・三陸を北上した
波を逃れた桜はいつものように
美しく満開になる それでいい
それぞれがそのとき なにげなく
自分をいっばいに咲かせればいいのだ

異変

あーたやすく言葉を失つてはならぬ
生きるものの悲しみあらば
分かち合った苦しみの言葉
いまこそ生きものの呻きに
対生する言葉を繋げよ
意識の底深く 凝る闇となるまえに
詩人よ いま生きものの先端で語れ

新年

金属が燃えている
風土が壊れている
ぼろぼろになった
いのちと絆
賭けごとのように風船を飛ばし
みんな知らんぷりしていた
文明の崖
きみは いま
ほんとうに抱けるか
暗くなつた霧の大地をさまよひ
それでも未来の言葉を紡ぎだし
結びなおしていけるか
まだ間に合うのならばと

詩人・科学者

わたしがだんだん遠くなる
いま意味の壊れていない人が
いるだろうか この国が
だんだん音や色の形だけになつても
意味をかるうじて保とうとする
詩人・科学者がいてほしい それでも

鉦

鉦は厨房では使えない
硬いカボチャを割るときや
鶏の首落としは人目を避けて
魔除けの鉦は外がいい
家の中では魔を差し招く
恐い不器用な神経です

モモンガの話

夏になるといつも南方で戦死した、息子のことでおかしくなり、麻切り包丁を持ち出して何やら叫び、誘蛾灯の辺りをさ迷う老母がいた。

「のんのさまの山には

ももんががあがいて、

暗くなると風呂敷をひろげて、

人さらいにやってくる。

乳の匂いのする

風呂敷に包まれた子どもは

奥山につれていかれて、

帰らなくなってしまうんだぞー」